

後漢書・呂匡伝

(TADA)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

後漢書に記される一人の男
戦人と称された男の生涯

目次

呂匡という男	1
黄巾の乱	11
戦	18

呂匡という男

戦場でしか生きられない人間だ。

そう呂匡を称したのは、呂匡と同じく異民族の討伐で功をあげた皇甫規と張奐であったか。呂匡はそれを聞いて当然だと返した記憶がある。呂匡の出身は幽州だった。呂匡は物心つくころには戦場に入った。軍に拾われて一兵士として使われていたのだ。呂匡は地獄のような戦場で生き残った。ひたすらに敵を殺し、仲間とともに戦う。それしか知らなかった。幽州にやってくる將軍は護国のためだと言っていたが、呂匡にとっては国などなくても構わない存在だった。何せ国は自分達に死ぬと言ってくる存在だったからだ。

二十代前半の頃に上級將校となった。その頃には呂匡を鍛えてくれた兵士達は原野の土に帰り、同年代の兵士達もまた少なかった。それでもやまない異民族の侵攻に備えて現地で將校を育てるようになり、その第一号となったのが呂匡であった。

呂匡は長くその地で戦い続けたおかげで、その地には誰よりも詳しくかった。その知識で異民族を倒し続けた。馬を走らせて戦場を疾駆し、双槍を持って異民族を討ち続けた。いつしか呂匡は双槍將と呼ばれるようになった。その名は異民族にとどまらず、国の中央にまで知られるようになった。その功により三十代後半で將軍となった。縁故主義や家柄が重視される国では異例の人事だという。だが、呂匡には興味がなかった。戦場しか知らない呂匡にとっては国など知らない存在だった。ただ、戦陣で仲間と飯を食い、酒を飲み、共に戦場を駆ける。それだけが呂匡の楽しみだった。

だから中央への召喚も拒否し続けた。中央は戦っている呂匡達に兵糧もろくに送らないロクデナシの集まりだったと思っただからだ。

だが、將軍になって戦場は次々と変わっていった。その時にたまたま戦場に一緒になったのが皇甫規と張奐だった。呂匡は中央から送られてくる將軍は弱いという印象だったが、二人は違った。

皇甫規は女性でありながら、腰の低い女性だった。中央から送られ

てくる將軍には女性が多いが、妙に偉ぶってばかりでろくに働かない連中ばかりだったので意外だった。皇甫規はさらには軍略が優れていた。呂匡は軍略を知らない。ただ戦いの中で育った勘で戦場を勝ち続けた男だった。だから、呂匡は自分とは違う戦い方をする皇甫規に新鮮な思いを感じた。

張奐は男だった。中央から送られてくる將軍には男が少ない。それは最初に国をたてた人物が女性であったかららしいが、呂匡は詳しく知らない。一兵士だったところに歴史に詳しい老人に教えてもらっただけである。だが、中央から送られてくる將軍が女ばかりだったからそういうものだと思っていたが、張奐は違った。張奐は武芸に優れていたが、それ以上に慌てるということをしなない男だった。異民族に奇襲された時も泰然自若として慌てることなく、冷静に迎撃して呂匡の援軍まで耐えたのである。

呂匡は皇甫規、張奐、そして段？の三人と共に戦場を駆けることが多くなった。気持ちが良いかった。一緒に戦っていて気持ちがいいと思えたのはその三人だけだった。だが、三人は中央に招聘されて都に行った。呂匡も共に招聘されたが断った。中央は自分の生きる場所ではない。そう思ったからだ。その時に張奐から嫁を取り子を成せと言われた。呂匡はそれを取り合わなかった。だが、あまりにもしつこかったので、異民族討伐の時に保護した混血の少女を養子にし、名を布と名付けた。字は学問も修めていた皇甫規に頼んで奉先とした。それから呂匡は原野を駆けながら布に武芸を教えた。自分は武芸しか知らないからだ。

それからも異民族と戦い続けていたら、呂匡の下に一人の少女が配属された。皇甫嵩。字を義真。戦友であった皇甫規の姪にあたるらしい。皇甫規からの書状を持ってやってきた。呂匡は彼女を上級将校にした。戦友からの書状があつたから上級将校からだ。呂匡軍は最初は一般兵から開始である。そこで才能が認められれば上級将校となる。その時の上級将校だったのは程普と黄忠だった。二人とも若い武芸を扱い、部隊の指揮もまた上手かった。

皇甫嵩はすぐに部隊を掌握した。皇甫規もそうだったが、兵士達か

ら支持を受けるのが拔群に上手かった。彼女はその部隊を率いて戦うことになったが、初陣は惨敗になった。兵士を気にして指示が遅れたせいだった。その時は呂匡の救援で助かったが、兵士を多く殺した。呂匡は多くの兵士が見る中で彼女を殴った。彼女はすぐに立ち上がることができなかったが、呂匡は無理矢理立ち上がらせて再度殴った。皇甫嵩は転がったままだったので、今度は蹴り飛ばした。おまえが指揮を誤れば仲間を多く殺す。

最後にそう一言だけ告げてその場を呂匡は去った。

その夜、皇甫嵩は一人で呂匡のところに行ってきた。呂匡は布に武芸を教えている最中だった。要件だったらその場で言えと告げると、彼女は自分には部隊の指揮はできないと言った。彼女は部隊一人一人と話、人柄を知り、人生を知った。そのために死ねというような真似はできないと言った。呂匡はそれに剣を投げつけた。

あれはおまえの部隊だ。それが指揮できないならおまえが死ね。

そんなことを言った覚えがある。彼女は戦友の姪であったが、自分の部下だった。だから、自分の仲間を殺した責任は自分でとれと言った。

彼女は剣を手にとったが、その手は震えていた。

だから呂匡は再度言った。仲間と語れ、と。

皇甫嵩はしばらく黙って立っていたが、しばらくすると一礼して去っていった。

翌日、皇甫嵩は部隊の指揮を続けさせて欲しいと言ってきたから認めめた。それから皇甫嵩はよく戦った。仲間を多く生き残らせる戦いを続けた。

そして異民族の大侵攻が起こった。この時に活躍したのが孫堅と馬騰という将だった。彼女達は総大将として派遣されてきた張奐付きの将だった。二人とも気持ちの良い将だった。その戦いの最中に張奐が病死した。元々病だったのを中央が無理矢理出陣させたそうである。国に翻弄されて死んだ戦友。その死を悼む暇もなく、総大将は自分にされた。それもまた国の意向だった。護国のために死ね。それが伝えられた命令だった。腹がたつたのでその場でその使者を

斬り殺した。そしてついてきていた怯える副使者にそいつの首をもたせ、言伝を伝えて追いつ返した。

俺は国のために死なん。ただ、友や仲間のために死ぬだけだ。

それが呂匡の返した中央に対する返答だった。

そして呂匡は戦場を疾駆した。両手に槍を持ち、配下についた孫堅、馬騰。上級将校から將軍クラスにあげた程普、黄忠、皇甫嵩を指揮して異民族を討ち破り、総大将の首を落とした。これによって呂匡の武名は中華に鳴り響いた。圧倒的な戦力差を覆して異民族を打ち破った名将。双槍将の名前は生きた伝説となったのである。

だが、呂匡は異民族を打ち破った後に、勅命によって捕らえられた。その戦いで異民族の脅威がなくなったことにより、今度は呂匡が恐れられたのである。勅命により呂匡は捕らえられ、都の地下深くにある牢獄に入れられた。

牢獄内は光が一切ない暗闇の世界だった。食事も三日に一度だけであり、中央の人間達は呂匡を殺そうとしていることを理解していた。

呂匡が生きながらえているのは、それに対する反抗心でしかない。中央の人間の思い通りになってたまるか。それだけを考えて老境の域に入っている肉体を耐えさせた。幸い体を動かすことは可能だったので、ひたすらに体を鍛えながら耐えた。

長い間牢獄の中で暮らし続けていると、突然牢獄から出された。呂匡は理由を知ろうとは思わなかった。どうせ異民族が暴れ出したからだと思った。

そして丁寧な馬車に乗せられて連れて行かれた先に会ったのは懐かしい顔だった。

呂匡の元で戦った皇甫嵩である。彼女は現在の国の状況を語った。頭に黄色い布を巻いた民が国に対して反乱を起こし、その鎮圧軍が組まれることになったこと。総大将に大將軍である何進という女がついたこと。各方面の討伐軍として皇甫嵩、慮植、朱儁の三将がついたこと。そして皇甫嵩は党錮の禁により捕らえられていた人物を解放するように皇帝に陳情して認められ、それが呂匡の解放に繋がった

ことを伝えた。

呂匡にはどうでもよかった。長い間牢獄で暮らしていて理解したのだ。戦友である皇甫規や張奐の言う通りだった。自分には戦場しかない。戦場で生きて戦場で死ぬ。それしかないと思いつめた。

皇甫嵩の話を切り上げると、呂匡は両手に槍を構えて振るい始めた。多少の衰えは感じるが戦える。まだ、戦うことができる。呂匡は体が熱くなるのを感じた。戦場を。ただ戦場を。

翌日、呂匡は皇甫嵩に連れられて反乱の討伐軍の総大将である何進在席で行われる軍議に連れていかれた。何進に何者か誰何されたので名前だけ告げると、出席していた諸将が息を飲むのを感じる。呂匡は軍議に出ている諸将の顔を見渡す。知らない顔ばかりだ。当然だろう。自分はずっと辺境で戦い続けた戦人であり、中央に連れてこられたのは牢獄に放り込まれるためだ。

呂匡は何進の隣に座らされた。女の権威付けのためだろう。興味がない。その場で皇甫嵩と朱儁が潁川方面、慮植とかいう女の将が冀州方面を担当することになった。そこで呂匡は荊州の賊を討てと命令された。皇甫嵩は呂匡は牢獄から出されたばかりなので、まずは体を休ませるべきと主張したが、何進はそれを一蹴した。慮植もまた皇甫嵩の意見に賛成したが、それでも何進の意見は変わることはなかった。

曰く、帝の温情に答えて敵を討てと。

呂匡は思わず笑ってしまった。何進はそれに怒る。何が可笑しいと。呂匡はハッキリと言いつ返した。

戦友である張奐は帝の命令で命を縮めた。俺は帝の命令で牢獄に放り込まれた。帝に対しては恨みしかない。

呂匡のはつきりとした言葉に軍議の会場は戦慄する。それは長い間戦場で生き続けた男の覇気に飲まれたと言つても構わない。何進は甲高い声をあげて衛兵を呼び、呂匡を殺そうとするが、呂匡は衛兵の武器を奪うと逆に殺戮した。その場にいる黄巾の乱討伐のために集められた諸将は動けない。それは老年にさしかかった男とは思えない武芸を見せられたからであり、男の殺気に萎縮したからだ。

呂匡は興味を失って、奪い取った剣を投げ捨てると軍議会場から出て行く。金髪の少女はどこに行くのかと聞かれ、呂匡は答えた。

荊州が俺の戦場と言うのならそこに行く。戦場が俺の居場所だ。それだけ言って呂匡は去った。軍議に圧倒的な存在感を残したまま。

数日後、呂匡は荊州に向けて出立する。呂匡が率いるのは昔いた呂匡軍ではない。呂匡軍は解散させられていたのである。呂匡が牢獄に放り込まれていたのは五年もの間だったらしい。そのために呂匡軍の残党がどうなったかもわからない。

呂匡はふと養子のことを思い出した。異民族の血が混ざっていることを証明するような褐色の肌に入れられた刺青。赤い髪に跳ねたように飛び出していた綸子。あの少女は幼ないながらもかなりの武芸を持っていた。おそらくはどこかの軍に所属しているだろう。あるいは自分の娘という理由で迫害されて賊にでもなったか。

そう考えていると、呂匡が率いる軍に近づいてくる一団があった。総数は五千ほど。呂匡は率いる兵士三千に陣形を組ませて相手の出方を待つ。正体不明の軍はある程度まで近づくと停止し、一本の旗を立てた。

深紅の布に呂の一字

呂匡が戦場で使い続けた旗であった。そして一人の少女が汗血馬に乗って呂匡の軍に近づいてくる。呂匡もまた単騎で少女の前に立った。

「……久しぶり、お父さん」

「布か」

少女は呂匡の養子である布であった。

「お父さんの率いていた直轄の五千を連れてきた。これで戦いに行ける」

「そうだな、だが布よ。何故俺が牢獄から出されたのを知った」

お互いに馬から降りて近づくと、布は甘えるように呂匡にじやれつ

いた。

「ん、皇甫義真から連絡があった。お父さんがまた戦場に出るつて。だから隠れ住んでいたところから出てきた」

布の簡単な説明。どうやら皇甫嵩が手を回していたらしい。数が少ないなら少ないなりの戦いをするだけだが、昔から率いていた直轄の五千がいるなら話は別だ。どうにかなる。

それから軍を再編成し、呂匡は布が連れてきた直轄五千を率いて戦うことにした。

荊州に入ると黄巾軍一万と出会ったが、呂匡はこれを鎧袖一触に粉碎した。たかだが、民を集めただけの兵士とも呼べない代物である。撃滅するのに時間がかからなかった。

一日の休憩を入れていると、再度呂匡軍に加わりたいと言ってくる一団があった。呂匡がそれを率いてきた人物に会うと、その人物もまた見覚えのある人物だった。青い長髪を靡かせた妙齡の女性、黄忠であつた。

「お久しぶりです、呂將軍。此度は呂將軍が遠征に出られると聞き、共に戦場に出ることをお許しただきたいと思ひ参上しました」

「構わない。俺の指揮に慣れている將が入ってくれるなら戦いやすくなる」

呂匡の言葉に黄忠は嬉しそうに笑つた。黄忠にとつて呂匡は自分を見出してくれた恩人であり、初恋の相手でもある。黄忠は呂匡が荊州に向かつてくることを知り、客將をしていた韓玄の元を去り、配下千と共に呂匡軍に來たのだ。

そして黄忠と同時にもう一人部隊を引き連れて呂匡軍に参加してきた。

黄忠と共に呂匡に見出された程普である。

程普は呂匡の投獄後、孫堅の推挙に応じて孫堅軍に加わっていた。だが、程普もまた呂匡に特別な思いを抱いていた。呂匡に見出されて上級將校となつて戦つたことはもちろんだが、呂匡が長い間幽州を守り続けていた実績である。程普は幽州の出身である。幼ないころから異民族の侵攻にさらされ続けてきた。だが、それを守り続けてきて

くれたのが呂匡だった。程普は呂匡軍が兵士を募集しているのを知ると、周囲の反対に押し切つて呂匡軍の兵士となった。それから呂匡軍の一員として戦い続けた。自分は幽州の平穩を守る將軍の部隊の一員として戦っていることに誇りを感じていた。そしてその働きが認められて上級將校となった時など、感激のあまり泣きそうになつたものである。それから程普は呂匡の信頼に応えるように戦い続けた。異民族の大侵攻では呂匡と共に膨大な数がいる敵本陣に斬り込んだのである。そして、呂匡が総大將を討つたことを知ると、敗走を始める異民族を追撃して散々に打ち破つた。だが、程普を絶望に叩きおとしたのが呂匡の投獄である。程普は怒り狂つた。中央で何もせずに安穩と暮らしている連中が、自分の故郷である幽州の守護神を理由もなく投獄したのだ。すぐさま程普は救出するために軍を編成しようとしたが、ここで黄忠と意見が割れた。黄忠は下手に動けば呂匡が殺される危険性を説き、程普は放つておいたらすぐにでも呂匡が殺されると言つた。

そこで動いたのが皇甫嵩だった。皇甫嵩は伯母の皇甫規に頼んで呂匡の助命嘆願をしたのだ。それだけでなく、宦官の重職を歴任し、呂匡のことを高く評価していた曹騰に接触して、帝自身に助命嘆願したのだ。涼州三明と言われた皇甫規と、三代に渡つて皇帝に仕えた曹騰の言葉は入れられ命だけは助けられた。

程普は一応にその沙汰に納得したものの、中央に抱えられるのは拒否し、戦場を共にした孫堅についていたのである。孫堅にも重用された程普だったが、心にはやはり呂匡がいた。だから、呂匡が荊州黄巾軍の討伐軍に任命されると知ると、孫堅や黄蓋、張昭等の制止を聞かずに当時から部下を連れて呂匡の元にやってきた。

「お久しぶりです、呂匡様。程徳謀、呂匡様をお守りできなかつた不忠を返すため、再び呂匡様の元で戦わせていただきたい」

程普は覚悟を決めていた。すべては呂匡のために戦おう。呂匡が死ぬと言えば死のう。そこにあるのは絶対的な忠誠心だった。

「程普、おまえもまた物好きだな。こんな老人のところに来てくるとは。だが、来てもらったからには働いてもらう。樂をできると思

うな」

「呂匡様の戦場が楽だった覚えがありません」

程普のまじめくさった言葉に呂匡は笑い飛ばした。相手より数が少ないのは当たり前。届かぬ兵糧を恨んで、敵から奪った戦場では使えない馬を潰して食らったこともある。苦しかったが、同時に楽しくもあった。気心を知れた仲間達。呂匡の人徳のおかげが、呂匡軍が家族のような温かみがあった。家族のために戦って、家族のために死ぬ。それは程普と黄忠には居心地のいい場所だった。

呂匡は黄忠と程普の参戦を受けて、軍をさらに再編成した。二人に中央からつけられた軍勢の指揮を任せただの。

程普と黄忠もそれに応えた。元々二人とも呂匡に見出された将である。長い間戦場を駆け抜けている呂匡には、戦人の見抜く力がある。今回も二人は呂匡の期待に応えた。見事に三日ほどで呂匡軍として戦えるほどにまで鍛え上げたのだ。

そこからは速かった。太守を殺して『神上使』と称していた張曼成を斬り、新たに指導者として立った趙弘も布に奇襲させて戦死させ、さらには新たに指導者となった韓忠を呂匡軍本隊が叩き潰して、荊州黄巾軍は呂匡が参戦してから僅か二ヶ月で消滅した。

呂匡はとりあえず新たな指示が出るまで宛近郊に駐屯した。黄忠は呂匡に宛に入るように進言したが、呂匡は城が苦手だと言って拒否した。

しばしの間は平穏な空気が流れたが、一通の文書が呂匡軍に届けられた。差出人は曹操。呂匡は気づかなかったが、軍議の席で呂匡に行き先を訪ねた少女であった。

呂匡は天幕を嫌う。風を感じ、大地を感じ、自然と共に生きる。それが幽州で生まれ戦い続けた呂匡の考えだった。そのために呂匡軍には天幕がほとんど存在しない。物資をためておくための天幕があるだけである。そんな理由で呂匡軍の軍議は大抵焚き火を囲みながら野外でおこなう。呂匡の養子である布や、黄忠、程普は慣れているが、新たに呂匡につけられた軍師である荀攸は未だに慣れない。だが、荀攸は呂匡軍の精強さは認めていた。圧倒的な強さを持って敵を

粉碎していく。なるほど、『双槍無敵』とはよく言ったものだ。

呂匡は曹操から届けられた書状を荀攸に投げる。呂匡の娘である布は父に似て武勇は凄まじいが、謀略には無頓着だ。父を守ればそれでいいと考えている。程普と黄忠は呂匡の指示に従うことを第一に考えており、呂匡に意見をすることはないだろう。だから呂匡は荀攸に書状を投げて意見を求めたのだ。

荀攸は書状に目を通す。

『冀州に残存戦力を結集させた黄巾賊と、決戦を行う。諸郡の太守は兵を率いて諸州の刺史の下に集まり馳せ参じよ。義勇兵、正規兵問わずに国を憂いる者達の加勢に期待するところ大である』

文章にはそう記されていた。おそらくは皇甫嵩と慮植が上手く冀州に黄巾賊を集めたのだろう。そこで最終決戦を行おうとしている。そこに戦力を理由をつけて出し惜しみをしている連中も引つ張り出そうとしているのだろう。

「荀公達。おまえはどう思う」

「おそらくは曹孟徳殿は諸侯がどのような人物か知りたいたのでしよう。だから、黄巾賊の討伐に理由をつけて諸侯を呼び寄せようとしている」

「不愉快ですね」

荀攸の言葉に吐き捨てるように言ったのは程普だった。程普は敬愛する呂匡が小娘に品定めされるのが気に食わないのだ。

「ですが、断るわけにもいかないのではないしょうか？ これは正式な朝廷からの文書でもありますし」

間を取り持つように黄忠が言う。布は会話に入ることはなく、ただ焚き火を見ている。

呂匡は一本の小枝を折って焚き火に放り込むと呟いた。

「冀州に戦場があるならば、そこに向かう。それが呂匡軍だ」

呂匡の言葉に程普と黄忠は拍手し、布は無言で頷き、荀攸は頭が痛そうに頭を押さえた。

黄巾の乱

冀州の黄巾討伐の大本営がそこにあった。曹操の目論見通りに中華に散らばった英傑達が集まってきている。

異民族の強敵であった壇石槐が侵攻してきた時に、辺境の守護神として名を馳せている呂匡の麾下として戦い、その後はそれぞれの任地で賊の討伐で名を挙げている孫堅と馬騰。漢の名門袁家の出身である袁紹と袁術。そして黄巾の乱討伐に各方面の将に任命された皇甫嵩と盧植、朱儁。曹操は皇甫嵩に従って戦ってきたが、それでわかったのは皇甫嵩の戦の上手さであった。涼州三明と呼ばれる皇甫規の姪だというので、下手ではないだろうと思っていたが、戦だけなら曹操をも超える采配を振るった。

だからこそ見たくなかった。皇甫嵩を育てたと呼ばれる『双槍将』呂匡の戦ぶりを。

彼は年齢を知らないそうである。物心ついた時には槍を持って異民族と戦っていたらしく、自分の産まれた年も、親も知らないと言われている。だが、戦は恐ろしく強いと聞いた。何せ曹操が産まれる何十年も前から戦場を駆け続けている人生なのだから。曹操は幼い頃に祖父である曹騰からよく呂匡の話聞いた。祖父曰く、呂匡がいるからこそ中央は平和なのだ。

それを実感したのは呂匡が投獄された直後からだった。異民族が再度辺境で暴れまわりはじめたのだ。異民族討伐で功を挙げた涼州三明は没し、守護神と呼ばれた呂匡は中央の考えによつて投獄された。最初は確認するように侵攻していた異民族だったが、深紅の呂旗が戦場にないことを確認すると鬱憤を晴らすかのように幽州を荒らし回った。一時期は冀州にまで侵攻してきたのだ。

その事件で曹操は祖父の言っていたことを確信に変えた。

その証明のように討伐軍が組まれた時に、呂匡が使っていた旗を偽装工作として使った時には異民族は逃げ散って、侵攻が収まったのである。

曹操は呂匡に会ってみたいと思った。その機会が今回の黄巾討伐

だった。皇甫嵩の進言によって呂匡の投獄が解かれたのだ。そして呂匡は黄巾討伐の軍議に皇甫嵩に連れられてやってきた。最初見た時に感じたのは畏怖だった。呂匡から発せられる戦人特有の覇気に気圧されたのだ。次に感じたのは憤りだった。呂匡は何進の指示に従って何進の隣に座ったのである。

ありえない。

曹操から見て何進は愚物である。人徳はあるのかもしれないが、人の上に立つ才能はない。だが、大將軍という肩書きだけで呂匡という怪物を隣に座らせ、呂匡もそれに従ったことに憤りを感じたのかもしれない。

曹操が呂匡に感じていたのは尊敬だった。自分が産まれる前から戦い続け、中央からの重職につけるような言葉を跳ね除けて戦場に拘り続けた戦人。その自分を貫き通す姿に憧れを感じたのだ。

呂匡ほどの人でも年をとれば権力に屈するのさ。

何進の隣に座った呂匡を見て、曹操はどこか失望していた。

だが、その失望も呂匡と何進のやりとりを聞いて消し飛んだ。皇帝のために戦えという指示を呂匡は鼻で笑い飛ばし。皇帝には戦友を殺された恨みしかない、と言い切ったのだ。

そうさ！ それこそがこの私が憧れた男だ！

軍議の席で思わず叫びそうになったのを必死に堪えた。洛陽でそんなことを言えば待っているのは死だ。特に何進は皇帝の外戚として成り上がった人間だ。皇帝の力こそが自分の力だと思っている女だ。だからこそ、何進は甲高い声で衛兵を呼んで呂匡を殺そうとした。しかし、何十年と戦場を駆け続けた男に衛兵風情が勝てるわけがない。呂匡は衛兵から剣を奪うと襲ってくる衛兵を斬り捨てた。その動きは老将の動きではない。戦人の動きだ。

ほとんどの衛兵を斬り捨てると、呂匡は興味を失ったかのように剣を投げ捨てると軍議から出て行こうとした。そこで曹操は問いかけてしまったのだ。どこに行くのかと。その返答もまた呂匡であった。

荊州が俺の戦場と言うのならそこに行く。戦場が俺の居場所だ。

それを聞いた曹操は益々痺れたと言っている。万の言葉を繋げら

れた言葉より、呂匡のその一言が心に沁みだ。その言葉は人生を戦に捧げた男の言葉だったからだ。

数日後、呂匡は黄巾が暴れ回る荊州に向けて出立した。そして僅か二ヶ月ほどで完全に鎮圧してしまっただ。太守を殺され、何度かの討伐軍も撃退されていた荊州黄巾党を呂匡は二ヶ月で鎮圧してしまっただ。この報告は潁川で戦っていた時に、皇甫嵩から聞いた。曹操の憧れは益々強くなった。それと同時に呂匡を配下に加えたいとも思った。

曹操には大望がある。中華に平穏と秩序をもたらすという大望である。だからこそ有能な人材は多く欲しい。呂匡には大きな領地を与えてもいいとさえ考える。

だが、それと同時に呂匡にはそのような推挙は受けて欲しくないと思う自分がある。

地位や名誉、領地とは無縁で己を貫き通す呂匡。それこそが呂匡なのだ。

そして呂匡の戦ぶりを自分の目で確かめたいと思い、皇甫嵩に進言して黄巾本体を冀州に押し込み、諸将に向けて檄文を卷いた。

その檄文によって諸将が冀州の地に集まった。無論、呂匡にも送ったが、返信はなく、まだ到着していない。

だが、曹操には確信があった。呂匡は必ずここに来るという確信が。

そしてその思いは的中する。

集まっている討伐軍に向かってやってくる総勢一万ほどの軍勢が深紅の呂旗を掲げながらやってきた。

曹操は気づかぬうちに口の端が持ち上がった。

黄巾討伐軍大本営。そこには曹操の檄文によって集まった諸将がいた。呂匡が天幕に入ると、視線が一斉に呂匡に注がれる。呂匡はそれを無視して末席に座った。皇甫嵩は上座に座るように言ってきたが、それを拒否した。

俺は大将ではない。

その一言で天幕内が静まり返る。黄巾討伐の総大将である何進は都から動いていない。呂匡は柄にもなくそれを皮肉ったのだ。一軍の将は兵の苦勞を知らなければならぬ。それは呂匡が長く戦い続けた末に辿り着いたことだった。

皇甫嵩を臨時の大将とし、慮植と朱儁が副将を務めることが軍議で決まった。その間呂匡は腕を組んで瞑目しているだけだった。興味がなかった。誰が大将だろうが自分の戦をするだけだと思っていた。

それが気に入らなかったのか金髪の小娘が噛み付いてきた。遅参したのは何故なのかということだった。こういう高圧的な女は中央の人間の特徴だ。真面目に相手をすれば馬鹿を見る。だから簡潔に答えた。

黄巾の兵糧集積地を潰して回った。

ただ、それだけを言った。軍師としてついてきていた荀攸が用意していた竹簡を皇甫嵩に渡した。その潰した集積地の数に皇甫嵩は絶句していた。皇甫嵩から回されて確認した慮植と朱儁もまた絶句した。潰した集積地の数は四十九。それを短期間で成し遂げたのは呂匡軍の中核である直轄軍と、程普、黄忠の働きが大きい。

皇甫嵩によって呂匡が潰した集積地の位置を、地図に書き込まれていく。その集積地は決戦の地に運び込まれるであろう集積地であった。それに気づいた諸将が呂匡のことを畏怖の眼差しで見ると、呂匡は変わらず腕を組んで瞑目したままだった。

だが、先ほどの金髪の小娘が再度噛み付いてきた。集結すべしとの書簡が届いたのならば、独断専行などせずここに集まるのが当然だ、と。呂匡はそこで初めて目を開いて、その小娘を見た。中央で苦勞を知らずに育った顔をしている。だから、呂匡は鼻で笑った。

貴様は腹を空かせて戦ったことがあるか？

呂匡の問いに金髪の小娘の顔が引きつる。呂匡はそれを気にせず続ける。

腹を空かせた兵は弱い。俺は兵糧が届かなく、腹を空かせた状態で戦わされた状況が幾度もある。そういう時には必ず仲間が死んだ。

その中には俺より強い兵士もいた。兵士に必要なのは護国の信念とか名声じゃない。一握りの兵糧だ。だから今回も兵糧の集積地を潰した。そうすれば敵が弱くなって、自分の仲間が生き残る可能性が増えるからだ。

呂匡はそこまで言い切ると、再度瞑目する。もう言うことはないといわんばかりの態度だった。

その後は皇甫嵩が空気を立て直し、軍議が再開された。だが、呂匡は目を開くことはない。そして配置が決められた。呂匡軍の配置は右翼。呂匡はそれだけを聞くとさっさと立ち上がって軍議の場から出て行く。呼び止める声も聞こえるが、呂匡はそれを無視した。

戦場が決まれば後は戦うだけである。

北郷一刀は未来からきた人間である。三国志。これは一刀が生まれた日本でもメジャーな物語だ。小説や漫画、ゲームにもなっている。一刀は男女が逆転しているとは言え、その世界に来てしまった。劉備達に拾われ、天の御遣いと呼ばれる存在にされてしまった。今は黄巾の乱の最終決戦。この冀州の地に英雄豪傑達が集まっていた。ここに来るまでの戦いで英雄的颯爽というものしかない物語上の戦場とは違う、生の怖さと残酷さのある戦いを経験したせいかな、彼の『会いたい』という思いは警戒心にその何割かを占められていた。

（曹操、孫堅、孫策、袁紹。やっぱり大勢力を築く人間は英雄的な威があるものなんだな……）

一刀はここに来るまでに遠目ではあるが、英傑達の姿を見てきた。単純に英雄豪傑という人種が美男美女であるこの世界に感謝する訳ではないが、そのお陰で彼はかなり歴史に名を残す者とそれ以外を反則めいた方法とは言え、識別できるようになっていた。

そして一刀は三国志で一番会ってみたい武将に会いにきた。

呂匡。字は不明。異民族と長い間戦い続け、朝廷からの招聘も拒否し続けた戦人。一度は牢獄に叩き込まれるが、黄巾の乱で釈放されて活躍。三国志の一番の英雄である曹操が尊敬していたと記述が残されるほどの人だ。

三国志は大きくわけて三部に別れている。

一部は黄巾の乱から始まる群雄割拠。

二部は力を持った曹操とそれに反抗する劉備と孫呉

三部は遺された軍師達の知略合戦

そのうちの一部で呂匡は消える。だが、それでも三国志の英雄達に大きな影響を残したのが呂匡だ。

もし呂匡が生きていれば。

そんなIFを書いた小説や漫画も多く出ている。一刀もそんな呂匡を見てみたかった。中国の歴史書に『呂匡以外に戦人という言葉を使うな』とまで書かれている男だ。

こっちの世界では有名な武将が女性になっていることも多いので、諸葛亮達に確認したが、こっちの世界でも人生を戦に捧げている男の老将であるらしい。

(戦場で両手に槍を持っていたら確定なんだけど、ここは味方の陣地だしなあ。後は養子だった呂布か？ おそらくは綸子と方天画戟を持った男か女がいたらわかるんだけど)

一刀は思わず呂匡軍を覗き込む。そこには思い思いに羽を伸ばす将兵の姿があった。

(生涯戦場って人だから、軍も常に引き締まっているのかと思ったけど、そうでもないのかな)

一刀も三国志を題材にしたゲームをやっていたが、どのゲームでも呂匡はバカみみたいに強かった。某無双のゲームでは難易度イージーでステータスMAXにしたキャラでも殺されるってどんな化け物だと思っただのである。しかも配下として呂布、程普、黄忠も出てくる。三人共呂匡に鍛えられたからバカみみたいに強い。誰か一人の相手をしている間に総大将が倒されてゲームオーバーがなんともあった。難易度ハードの呂匡を倒す動画なんか再生数がすごいことになった。その動画も自キャラを呂匡にするというものだったが。

「何者だ」

突然声をかけられたことに、一刀は心臓が止まるかのように感じた。しかもその声は威圧感がこもっており、下手な返答をしたら殺さ

れると本能的に理解した。

一刀が振り向くとそこにいたのは一人の老将。だが、老いている印象はなく、背筋は伸びて眼光も鋭い。背丈もあるようだが、どれくらいかまではわからなかった。

「何者だ」

老将は再度問いかけてきた。手が腰の剣に伸びている。このまま黙っていたら殺される。一刀は慌てて口を開いた。

「ぎ、義勇軍を率いる北郷一刀といいます！」

「……義勇軍？」

「は、はい！ 公孫瓚將軍のところまで陣借りしています！」

一刀は緊張で喉がカラカラになっていた。老将は少し考えていた素振りを見せたが、剣からは手を離れた。

「それで？ その義勇軍の者が俺の陣に何のようだ」

老将の言葉に、一刀は目の前の老将が呂匡だということに気づく。

「その……中華に名高き『双槍将』の軍を見てみたいと思ひ参りました！」

諸葛亮に助言されていた通りに答える一刀。受け取り方によっては阿諛追従と受け取られても仕方ない言い方だった。

呂匡は一瞬だけ不愉快そうな顔を浮かべ、吐き捨てる。

「俺の軍など長く戦い続ければ嫌でも身につく。若いうちに身につけるなら軍略をやれ。それで軍の体裁は保てる」

呂匡はそれだけ言い捨てると、さっさと陣営の中に入って行く。それを一刀は腰を抜かしながら見送るのであった。

戦

どのような人物なのだろうか。

郭嘉は呂匡の陣で知己の荀攸の伝手を使って黄巾との最終決戦の前に呂匡と会う機会を設けさせてもらった。

郭嘉は戦術が好きだった。幼いころから戦術書、兵法書を読んで育った。豫州潁川郡の出身で、様々な知識人とも知り合った。知識人とは多く知り合えたが、兵法を語り合える相手は少なかった。

郭嘉が憧れたのは呂匡だった。自分の年齢も知らなく、字はおろか真名すらない。そのために中央の知識人達は呂匡を馬鹿にした。郭嘉はそのことでよく口論をおこした。郭嘉の言い分は呂匡は軍人であり、勝つことが仕事なのだからそれ以外はどうでもいいことだと言いつ張った。しかし、知識人の多くは彼を認めなかった。呂匡に関してだけは、同郷の荀彧とは決して話は合わなかった。

郭嘉は将来を見通す才能を持っていた。

それを知っている友誼を結んだ人々から出仕を求められたが、彼女は拒否し続けた。そして、あまりにもしつこくなつたので彼女は旅に出た。目的地は決まっていた。

呂匡が戦い続けた幽州。

彼女はそこに入り、幽州に住む人々から呂匡の話をきいて回った。幽州に住む人々は皇帝の名前は知らなくても、呂匡の名前は絶対に知っていた。そして呂匡を絶対的な守護者として自慢そうに話すのだ。

郭嘉が幽州で呂匡に聞いて回っていた時に、一人の老人と知り合った。その老人は呂匡の戦歴をよく知っていた。何より戦場での動きも詳しく知っていた。郭嘉は歓喜した。

呂匡が投獄されたことにより、呂匡軍は解散させられた。養子である呂布は行方不明。呂匡軍の叩き上げで有名な黄忠は荊州に行き、程普は孫堅の下についた。呂布を除いた二人は中央からの招聘を拒否しての行動だった。

そのせいで呂匡軍の戦歴は知っていても、軍の動きは知らない人物

ばかりだった。それでも郭嘉は呂匡が戦った地に赴いて、彼女なりに考察を試みたりしたが、それでも呂匡の動きはわからなかった。

酒場で出会った老人に郭嘉は呂匡での戦場での動きを教えて欲しいと願った。だが、その老人に断られた。自分は平民で他人に教えられない学がないという理由だった。

しかし、郭嘉はせっかく呂匡の戦術を知る機会を逃したくなかった。

だから、三日間老人の家に訪問して頭を下げ続けた。老人の家は粗末なものだった。結婚はしていないのか、老人は家に一人だった。初日と二日目は断られたが、三日目ようやくあまり言いふらさないことを条件に話してもらえることになった。

そして老人は語った。辺境の守護神として戦い続けている男の戦場を。

郭嘉は前もって幽州での呂匡が戦った戦場の地図を用意していた。それに駒をおきながら老人に呂匡の動きを教えてもらった。

郭嘉はその動きに戦慄したと同時に歓喜した。

呂匡の動きは軍略や兵法には頼らない戦いだった。全ては経験と直感によって戦っていたのだ。自分の知らない戦いかた。土地を利用し、人を利用し、時には気候すら利用する。それは生き残るために磨かれた戦の結晶と言ってもいい。

郭嘉は色々なことを質問し、老人もできる範囲でそれに答えてくれた。

五日間。郭嘉は老人に教えを乞いた。そして最後に尋ねたのだ。呂匡の戦をよく知る貴方は何者なのかと。

老人は高騎と名乗った。

郭嘉はその名前を知っていた。呂匡の副官として何十年も戦い続けた男の名前だった。郭嘉は慌てた。何せ相手は自分が尊敬する男の下で戦い続けていた男だったからだ。

高騎は呂匡の投獄後に軍から身を退いた。幽州の軍からは止まって欲しいという声が出ていたそうだが、彼はそれを拒否して隠棲した。

高騎にとって軍とは呂匡の副官であり、それが全てだったのだ。

高騎は呂匡の最初の部下であり、年も近かったのですぐ仲良くなつたそう。そして呂匡が將軍となった時にその副官となり、戦い続けた。呂匡が張奐の勧めで養子をとった時、彼もまた混血の少女を養子にした。そして将来は呂匡の娘を補佐するための教育をしたと言った。

郭嘉は思わず尋ねてしまった。呂匡の娘と貴方の娘はどうなったのか、と。

高騎はただ遠い目をして言った。

再び深紅の呂旗が翻るの待つために雌伏している、と。

それは呂匡が再度戦場に戻ってくるのを待っている発言だった。

そしてその日から数日後、高騎老人は静かに亡くなった。同じ村に住む人々は彼の経歴を知っていたのか、静かに涙を流していた。

郭嘉は高騎老人の葬式の資金を出して幽州から去った。それは自分が幽州で学ぶことはなくなったと思つたからだ。

それから郭嘉は名前や経歴を隠しながら各地の諸侯や豪族の下で軍師として賊などを打ち破つた。そこには兵法書等で学んだことだけでなく、高騎老人から教わつたことを含んでいた。どこでも彼女を召し抱えようとしたが、彼女はそれらをすべて拒否した。

自分が仕えるべきなのは誰だ。

常に自問自答を繰り返した。その旅の途中で同行者もできた。郭嘉と同じく軍師である程昱と武芸者の趙雲だった。二人とも曲者だった。程昱は常に眠そうな雰囲気を出しているながら、誰よりも注意深かった。趙雲は誰かをからかうことをやめなかったが、武芸に関しては貪欲だった。なんとなく気があつたので三人で旅している時に黄巾の乱がった。

郭嘉は冀州が決戦地になることが見えた。

だから二人に言つて冀州に残ることにした。そして郭嘉が目論んだ通り各地の諸侯が集まつてきていた。曹操、袁紹、袁術、馬騰、孫堅、公孫瓚。皇甫嵩、慮植、朱儁の三將は漢の將軍なので除外しても、数多い英傑達が集まつた。三人で各地の諸侯を回つた。袁紹と袁術

は論外。馬騰と孫堅は及第点だが、仕える気にはならなかった。唯一仕えてもいいと思っただのは曹操だったが、なんとなくまだ早いと感じて下がった。程昱は曹操に仕えることになり、趙雲は公孫瓚の白馬義従が気に入ったらしく、客将をしようと別れた。郭嘉も曹操から直々に推挙されたが断った。理由は自分でもわからない。ただ、まだ仕えるべきではないと思っただからだ。

そして数日後、郭嘉は驚くべきものを見た。

深紅の呂旗を掲げた一団が官軍へと合流してきたのだ。それから慌てて知己の相手に話しを聞くと、皇甫崇が呂匡の解放を願ってそれが認められて荊州黄巾軍を討伐に出ているらしい。しかも、官軍が手を焼いていた荊州黄巾軍を二ヶ月という短期間で殲滅させた。

郭嘉はそこからの動きは素早かった。呂匡に目通りを願ったのだ。最初は呂匡の子飼いの将である程普に断られた。しかし、諦めきれずに知己の荀攸が呂匡軍の参謀を務めていることを知って、そこから程普と黄忠と会う機会ができた。そこで郭嘉は正直に自分は呂匡に憧れていることを語った。そして彼の戦歴や戦術等も幽州で高騎という老人から習ったことを話した。それまで全く興味を示していなかった程普と黄忠が高騎の名前が出た瞬間に表情が変わった。

それからすぐに呂匡と会わせてもらう機会を作ってもらえた。郭嘉は一つの焚き火に案内された。そこには赤い髪で褐色の肌に刺青が入っている少女と、黒髪を後ろでまとめている少女が座っていた。

郭嘉は黙って焚き火の側に座った。

呂匡軍は天幕を使わないことを知っていたからだ。おそらくはこの焚き火が呂匡軍の重臣達が集まる会議場なのだろう。

少女達はこちらを横目で一瞥するだけで口を開くことはなかった。郭嘉も口を開くことはしなかった。これから会う呂匡に飲み込まれないために覚悟を決めるためだ。

「おまえが高騎の行方を知る者か」

突如響いた巖のごとき声。そこにあったのは威厳と威圧感、そして戦人特有の気配だった。郭嘉はその人物が呂匡だと気づき、すぐに臣下のごとき礼をするが、現れた老人はそれをめんどくさそうに解かせ

ると焚き火の近くに座る。近くには程普と黄忠がいた。

「高騎はどうなった？」

「一年ほど前に亡くなりました」

呂匡の問いに答えると、呂匡は瞑目した。

「どのようなにして死んだ」

「私に將軍の戦歴、戦術、軍の運営方法などを教えてくださった後に安らかに亡くなられました」

郭嘉の言葉に呂匡は動じない。しかし、郭嘉には自分が最も信頼する人間であり、共に多くの戦場を駆け抜けた戦友の死を悼んでいるように感じた。

「高順」

「……はい」

そして呂匡は一人の名前を呼んだ。それに反応したのは黒髪の少女だった。そこで郭嘉は初めてこの少女があの人老の養子だったことを知った。高順は真つ直ぐに呂匡を見つめていた。

「今日、一晩だけ泣け」

呂匡の言葉に高順は少しだけ表情を崩す。それからすぐに立ち上がるとその場から立ち去った。戦友の死を悼む。しかし指揮官は動揺を戦場に持ち込んではいけない。だから呂匡は一晩で気持ちの整理をつけると言ったのだろう。

高騎老人の言う通りだった。

呂匡は部下や戦友を大事にする。自分には家族と呼べる存在がいなかったためか、自分の軍をそれに見立てる。そんな存在が上にいるために呂匡軍には一体感がある。それは他の諸侯の軍には見られないことだった。

「郭奉孝だったな。高騎のことは感謝する。何か礼をしたいが、残念ながら俺は牢獄から出されたばかりで礼をすることができない」

「それならば！」

呂匡の言葉に思わず声が大きくなる。程普と黄忠は少し驚いた表情で見えていたが、呂匡と赤髪の少女は動じずに郭嘉を見ている。郭嘉は一度咳払いをすると再度口を開く。

「呂將軍の側で今回の戦を見させていただきたい」
そこで初めて呂匡の表情が変わった。どちらかと言えば呆れたよ
うな表情だ。

「みたところおまえは武芸を収めているようには見えない。それで
うちの軍に入りたいと言うのか?」

「郭奉孝は軍師としてその知略を知られています」

郭嘉に助けを出してくれたのは荀攸だった。その荀攸の言葉に呂
匡は頷いた。

「いいだろう。だったら荀公達と一緒に本陣にいるがいい」

「いえ、できることでしたら呂將軍の駆ける最前線に見させていた
だきたい」

呂匡の言葉に郭嘉はあくまで呂匡の側で見たいと言った。そこで
初めて呂匡の表情が変わった。

「馬に乗れるか?」

「嗜み程度には。しかし呂將軍の騎馬隊の動きにはついていけない
でしょう」

「槍は?」

「無理です」

「弓」

「引けません」

呂匡の問いに答えていく郭嘉。どれもある程度は使えるが、呂匡軍
の基準で考えたら使えないと同義だ。

「それで最前線に出たいと言うのか?」

「諦め掛けていた呂將軍の戦を肌で感じるまたとない機会です。私
はそれを逃したくありません」

そこで呂匡は大きく笑い飛ばした。

「ならばどうやってついてくる」

「誰かの騎馬の後ろに乗せていただけたらありがたいと思います」

「邪魔だと判断したら敵陣であろうとその場で捨てて行くぞ?」

「構いません」

郭嘉は本気でそう思っていた。自分が憧れ続けた呂匡軍の戦い。

たとえそれによって自分の命を落とすことになっても経験してみたいことだった。

郭嘉の覚悟を見たのか、呂匡は口の端を上げて笑った。

「布」

「……ん」

呂匡の言葉に赤髪の少女が答える。この少女が呂匡の養子である呂布なのか。

「おまえの赤兎馬の後ろにくくりつけてやれ。邪魔になったら捨ててしまえ」

「わかった」

その会話で自分が呂匡軍の最前線に行けるということに気づいた郭嘉が感じたのは、恐怖ではなく歓喜であった。

明朝、呂匡は敵陣を眺めていた。供をしているのは布一人だけだった。穴だらけだ。

呂匡はどこか失望を感じながらそう思った。久しぶりの戦で気がたっている。だが、その相手は民兵に毛が生えた程度の相手だ。自分が死ぬ気を尽くして戦うような相手ではない。

荊州での戦いもそうだった。呂匡にしてみれば大した相手ではなかった。数は多かったがそれだけだ。

「布よ。中央の軍は弱いな」

「……ん」

呂匡の言葉に呂布は頷いた。呂布もまた中央の軍の弱さは知っていた。五千の兵を食わせるために官軍の兵糧庫を襲ったりしたからだ。基本的には自給自足をしていたが、それでも足りない時は官軍を襲った。村を襲わなかったのは父の教えと、呂匡軍は民や異民族出身者が多かったからだ。

異民族は強い者に従う。

だから呂匡に打ちのめされた多くの異民族が呂匡軍に入り、さらに

その強さは増した。程普は幽州の豪族の出身だが、そのような出身者のほうが呂匡軍には珍しかった。

そして異民族は官軍を嫌った。

それは弱いからだ。弱肉強食。それが異民族の理だった。呂布達は呂匡投獄後の異民族の大侵攻には関わらなかつた。それは呂匡がいない官軍がどのような戦をするか興味を持ったからだ。

だが、結果は酷いものだった。

冀州にまで侵攻された時に呂布とその副官だった高順の心に芽生えたのは失望だった。そして官軍が偽の呂匡の旗を掲げたのを見て怒りを覚えた

自分達の都合でお父さんを投獄するときながら、お父さんの名声を利用するのか。

そう思った時に、呂匡軍残党は官軍から兵糧を奪うことに遠慮はなくなつた。時には予想以上に兵糧があつて、近隣の村に配つたこともある。呂匡軍は腹を空かせる辛さを知っているからだつた。

そして呂布は、父の部下だった皇甫崇から書状をもらつて、父が解放されることを知つた。それから父が投獄された後も鍛え続けていた兵と馬を連れて父に合流した。

五年の牢獄生活で父の体を心配した呂布だったが、杞憂に終わった。少し目が悪くなつていただけで、体は頑健そのものだった。戦場も昔のように疾駆していた。両手に槍を持ち敵兵を薙ぎ払っていた。

それを見て安堵したのが呂布と高順であり、呂匡軍はその呂匡の姿を見て畏敬の念を抱いた。

黄忠と程普も合流し、完全とは言えないが昔のような呂匡軍に戻つた。父の副官だった高騎は亡くなつたということ、昨日呂匡陣に来た流れの軍師から聞いた。父は黙っていたが、呂布は自分の半身を失われたことに対する悲しみの証明だということに気づいた。

若い頃からの戦友が、戦場で死ねずに病で死んだ。

それが父には苦痛だっただろう。

二人戦場で死のう。

それは呂布と高順が幼い頃にそれぞれの養父が酒を飲みながら

語っていたことだった。

「……お父さんは戦場で死ぬ？」

「今更俺が戦場以外で死ぬるわけがなからう」

呂布の問いかけに呂匡は当然のように答えた。言外に友のために戦場で死ぬと語っていた。

「じゃあ布も戦場で死ぬ」

「いい心がけだ」

呂布が言うと、呂匡は笑いながら言ってきた。昔から変わらない笑みだ。呂布はこの包み込むような優しさを持つ笑顔が好きだった。苛烈な戦に似合わぬ笑顔。呂匡軍の多くはまず、呂匡の強さに惚れて、次にその人柄に惚れる。そうして一体感が強い軍が生まれたのだ。

「呂匡様、 呂布殿」

二人のところやってきたのは程普だった。彼女もまた呂匡軍の叩き上げ。一度は孫堅に仕えたが、呂匡の復活を聞いて合流してきた人間だった。

「そろそろお戻りください」

程普の言葉に呂匡は戻り始める。呂布は地面に突き刺していた方天画戟を引き抜いてそれに続く。程普もまた黙って従った。

開戦直後、呂匡は疾風のように戦場を駆け抜けた。対峙する黄巾軍を真っ二つに引き裂いたのだ。そこから半分を呂匡、程普、黄忠の三隊に別れて殲滅した。残りの半分は呂匡軍と同じく右翼に配置されていた董卓、公孫瓚、そして慮植本隊が押し包んでいた。

呂匡は合図を出して分離していた部隊を呼び戻す。すぐに程普と黄忠は合流してきた。

「敵将はいたか？」

「いません」

「同じく」

呂匡の問いかけに程普と黄忠は答える。呂匡も討った手応えはな

く、呂布と高順を見ても黙って首を振った。逃亡したことも考えたが、最後まである程度は抵抗してきたことを考えると、その可能性は低い。

ならば残り半分か。

呂匡はそう思つて黄巾右翼の残党を見る。董卓軍、公孫瓚軍、慮植軍に追い込まれながらも必死に耐えている。呂匡はその中で中心を探す。

見つけた。

呂匡は黄巾右翼で指揮をとる人間を見つけた。馬上で必死に叫び続けている。多くの騎馬で殺しにいくのは味方が邪魔になる。

「布」

「ん」

「五百であれを殺してこい」

呂匡は片方の槍で黄巾の将を指し示すと、呂布は解き放たれた猟犬のように赤兎馬をかけさせながら黄巾右翼に突入していった。そこで呂匡は呂布の後ろに郭嘉がいたことを思い出したが、気にしないことにした。呂布は邪魔だと判断したら勝手に捨てるだろうし、郭嘉もそれに同意していた。

呂布率いる呂匡軍騎馬五百は無人の草原を行くように黄巾軍を切り裂いていく。呂布は方天画戟を振り回しながら敵兵を屠っていく。近くにいる高順もまた、高騎に教え込まれた狼牙棒で敵兵を殺していった。

「高順」

「おまかせください」

呂布はある程度まで黄巾の将に近づくと、高順に一声かける。高順もそれだけで理解したのか、周囲の兵を散らし始めた。そのまま呂布は一気に黄巾の将に近づく。親衛隊と思われる兵が邪魔してきたが、呂布は方天画戟を一閃してそれを片付けると残った黄巾の将を真っ二つにする。勢いが良すぎて馬まで両断してしまった。呂布は心の片隅で相手の馬に謝罪すると、すぐに馬首を返して離脱を始める。相手の頭を潰して逃げ散る場合もあれば、逆に怒って襲いかかってくる

連中もいる。呂布はそれを知っていたから、面倒なことはずせずに離脱することにした。すでに高順が退路を確保しているのでそこを通るだけだ。

呂布が高順と共に呂匡に合流する時には、黄巾右翼は混乱していた。指示を出す人間がいなくなったからだろう。

「残党の処理は連中に任せていいだろう」

「私達はいかがなさいますか？」

呂匡の言葉に訊ねたのは黄忠だった。

「中央と左翼を手伝ってやろう。左翼の朱公偉は知らないが、皇甫崇は上手く合わせるだろう」